

## 「神に気づくこと」と「神を知ること」

——フッサールのファイヒテ講義を手引きにして——

島 田 喜 行

はじめに

本論考は一九一七年に行われたフッサールの「ファイヒテの人間性の理想 *Fiches Menschheitsideal*」講義（以下「ファイヒテ講義」と略記する）<sup>(1)</sup>で展開されるファイヒテとその教説を取り上げ、そこからファイヒテの〈哲学による宗教の基礎づけ関係〉という哲学的知見を継承するフッサール現象学と宗教との関係について考察する。

本論考で取り上げる「ファイヒテ講義」は、読者に対して、フッサールらしくない記述である、という印象や違和感を与えるものであると思われる<sup>(2)</sup>。読者にそうした印象や違和感を与える要因は、この講義が第一次世界大戦末期というきわめて特殊な時代状況下でなされたということ、そしてこの講義のなかでファイヒテに対する批判がほとんど見出されず、まるでフッサールがそのすべてに賛同しているかのような記述に終始しているように見えること、である。

しかし本当にフッサールがファイヒテの教説のすべてに賛同していたと解釈するべきであろうか。あるいは、特殊な時代状況に鑑みて、この講義をフッサールの他の講義や著作とはまったく別物のフッサールの哲学的見解がほとんど反映されていない講義とみなすべきであろうか。いやむしろ、フッサールにはこの講義で描き出されるファイヒテの姿を通し

てしか聴講者に訴えることができない何らかの哲学的見解があり、そのために意図的にこのような記述スタイルを採ったのではないだろうか。本論考の目的はこうした問いに一つの答を提示することである。

### 1 「フィヒテ講義」の概要

本節では、フッサールにとつてのフィヒテとその教説とを明らかにするために、本論考にとつて必要な限りで「フィヒテ講義」の内容を概観する。それに先立って、先に触れたこの講義が行われた際の特異な時代状況について簡単に確認しておきたい。

「フィヒテ講義」は第一次世界大戦の真只中であつた一九一七年一月八日から一七日にかけて、フライブルク大学で三回にわたつて「戦争従軍者 *Kriegsteilnehmer* のためのコース」のための講義として行われた。この「戦争従軍者」とは、「戦地に赴く学生あるいは戦地からもどつて来て再び受講する学生」のことであつた。こうした聴講生を対象として、厳しい戦況下に置かれていた当時のドイツで行われた「この種の催しが士気を高め戦意を高揚させるためのものであることは、容易に察せられる」だろう<sup>(3)</sup>。こうした時代背景を根拠として、フッサールの哲学的見解の有無に関して「フィヒテ講義」と他の講義や著作との間に差異を見出そうとする解釈がなされるのである。

ではフッサールはこの講義のなかでフィヒテをどのような哲学者とみていたかのだろうか。

宗教改革からゲーテの死の頃まで（一八三二年）のドイツの精神生はわたしたちに対してある特徴的な光景を見せつける。ほんのわずかな起伏しかない荒涼とした乾燥地帯から孤立した高峰が、孤独で偉大な精神が立ち上がる。…哲学においては、天才カントと彼によって呼び覚まされたドイツ観念論の哲学、…フィヒテ、シェリング、

ヘーゲル、シュライエルマッヒャー、ショーペンハウアーのようなそれ自身登頂しがたい頂をもつ巨大な山脈が立ち上がる (XXV, 267)。

近代ドイツの精神生を代表するドイツ観念論は「世界中に広まって世界文化の改変 *Umwandlung*」を引き起こすかと思われたほど強力なものだったのだが、その「活力」も「新しい精密科学」と「それらによって規定された技術文化」の台頭とともに「一九世紀半ば」にはもう失われてしまった。さらに第一次世界大戦によって、今度はドイツという国家そのものの存亡の危機という「わたしたちドイツ国家に対する巨大で過酷な運命」がもたらされたのである (Vgl. XXV, 267 f.)。こうした二〇世紀初頭にドイツを襲った危機的状况を乗り越えるための一つの指針を与える先人がフィヒテであった。

…一世紀前すでにわたしたちドイツ民族は生存闘争を戦った。イエナでプロイセンとともに汚辱にまみれたドイツは立ち上がり、そして勝利した。それ(ドイツ)が勝利したのは、ドイツ観念論と当時のその旗手フィヒテがそのなかで目覚めさせた新しい精神の力によってに他ならない。ただ国家的に芽吹いたもろもろの理想だけが、ただ最高次の宗教的かつ倫理的な理念への内的転向 *Imewendung* だけが…弱く小さな人間から英雄をつくる力を目覚めさせたのであった (XXV, 268 f.)。

フッサールが「フィヒテ講義」のなかで示したフィヒテとは、第一次世界大戦の惨禍に見舞われているドイツを立て直すための「解放闘争の哲学者 J. G. フィヒテ」であった。このフィヒテ像とともに彼の教説は「彼の哲学のもっとも深い源泉からなされた真正な人間性という理想の新たな形態化」として描きだされる (Vgl. XXV, 269)。

ここで、本節で明らかにすべき二つの問いが明確になる。第一に、「解放闘争の哲学者」としてのフィヒテとはどのような特徴を持つ者なのか、第二に、「真正な人間性という理想の新たな形態化」とみなされるフィヒテの教説とはいかなる教説か。

まず第一の問いについて考えてみよう。フッサールによれば、このフィヒテは「徹頭徹尾、実践的に方向づけられた本性」(XXV, 269)をもつ者であり「倫理的—宗教的改革者、人類の教育者」(ibid.)である。もちろんフッサールは、こうした表現によって、フィヒテがたんなる「著名な愛国的弁士、倫理実践者 *Eniker*、神を捜索する者」だとか「道德伝道者」や「哲学的司祭」にすぎないと主張しているのではない。というのも、フッサールは「彼の倫理的—宗教的直観はすべて、彼のもつで理論的に係留されている *theoretisch verankert sein*」と考えていたからである (vgl. XXV, 269f.)。

フッサールは、この理論的に係留された倫理的—宗教的直観、換言すれば、確固たる理論によって基礎づけられた倫理的—宗教的教説をもつとされるフィヒテをプラトんに比肩させつつ説明する。

…それは例えばプラトンのような、過去の他の偉大な哲学者の場合とまったく同様である。自然的経験と自然的思惟から遠く離れたところにある、最高次の問題に厳密に学的な認識という光を当てて照らし出そうと意欲する哲学は、究極妥当的に基礎づけられた学問という段階を這い上がるために、力を振り絞った思惟作業のはるかに長い道のりと時代とを必要とする (XXV, 270)。

…それとともに、わたし「フッサール」があなた方「聴講者たち」にフィヒテの著作を講読するとを推薦したいという態度が特徴づけられる。「推薦は、」あなた方が、いつか固い殻から抜け出して、プラトンとまったく似たよ

うな仕方では、フィヒテから発せられるかのもっとも高貴な向上 *Erhöhung* と気力の回復 *Ergückung* とを感じるようになるだろうという確かな見込みにおいて「なされている」。なぜならば、彼もまたまさに、理論的好奇心を満足させるだけでなく、人格性のもっとも深い深みへと入り込み、ただちにこれ「人格性」を作り換え *umschaffen*、高次の精神的位階と力へと高めるような認識の偉大な予見者、予感者の一人であったからである (XXXV, 271)。

このように、プラトンとの類比によってフィヒテの実践的性格が強調される場合に注意しなければならないことは、プラトンにおいてと同様、フィヒテにおいても、人格性の刷新という倫理的—宗教的な実践的営為を行うまさにそのため、実践からは明確な仕方では区別される理論が必然的に要請される、とフッサールが考えていることである。

哲学という領土に由来する純粹に理論的な問いの独自性は、そうした「問いの」解答の方向が生を規定し *Lebensbestimmend*、人格的な生に最高の目標を与えることとして決定的なもの *entscheidend* となることがあり、またそうならなければならない、ということである。なぜ偉大な実践者フィヒテがあのような情熱をもってある種の理論的な態度決定に関心を示したのか、なぜ彼が彼の「観念論」による人類のすべての幸福、すべての人類の向上と人類の救済とを期待していたのか、ということをこの脈略が説明する (ibid.)。

フッサールにとってのフィヒテは、プラトンと同様、「徹頭徹尾、観念論的／理想主義的実践者 *idealistischer Praktiker*」(XXV, 278)、「すなわち、「理論的な世界解釈が実践的な人類の向上と人類の救済のための土台、そこから生じる人類の目標を指し示すことによる人間の内的な作り換えのための土台となる」(ibid.)と考えていた実践者なのである」(二)。

では「真正な人間性という理想の新たな形態化」とみなされるフィヒテの教説とはいかなる教説なのか。フッサールによれば、それは「世界を絶対的自我の目的論的産物として理解すること」(XXV, 276)を指す教説である。この教説における「世界を創造する原理」とは「この世界の目的論的原因」として「徹頭徹尾、絶対的自我に内在的である」「神」のことである。フィヒテは、この「神」を当初「人倫的世界秩序 *sittliche Weltordnung*」と同一視し(Vgl., XXV, 277)「そこからすべての存在が目的論的に湧出してくる『秩序ツケル秩序 *ordo ordinans*』」(XXV, 280 f.)とみなしていた。

しかしフッサールは、無神論論争を経て『人間の使命』が公刊された一八〇〇年を境にしてフィヒテのこの「神」の位置づけが変更された、と考えている。

…そこではもう神と道德的世界秩序 *moralische Weltordnung* との、したがって宗教と純粋な道德性との同一視が消えている (XXV, 281)。

…言及したように、一八〇〇年の『人間の使命』においてすでに、(そこで)どれだけ道德主義的動機 *moralisches Motiv* がなおも鳴り響いていようと、彼はある新たな、独自の宗教的動機を自らに与えている。すなわち、神はもはや秩序ツケル秩序ではなく、ここでそう呼ばれているように、これらの秩序をはじめて生じさせる無限の意志なのである (XXV, 282)。

端的に言えば、この変更とは道德と宗教とを峻別し、さらに「人倫的生は、高次段階である宗教的な生においてはじめて完結する下部段階である」(XXV, 282 f.)とする変更である。

ここで重要なことは、フッサールがこのファイヒテの変更を「彼の実践的本性はいまやいつそう実践的なものと引つ張られている」(Hua XXV, 282)、と評価していることである。先に見たように、ファイヒテの実践的本性とは「理論的な世界解釈が実践的な人類の向上と人類の救済、人間の内的な作り換えのための土台となる」とする哲学的立場に固有の本性のことである。それゆえ、この変更は、理論による人間の生の実践的刷新を目指さずファイヒテが自覚的に採用した変更であり、ファイヒテの実践的本性の深化なのである。長澤邦彦はこの変更の意味を知識学の深化との関係において次のように説明する。

こうしてこの時期のファイヒテ知識学は、無神論論争を経て、：絶対〔的自〕我から絶対知へと深まってくるのであるが、このような知識学の深化発展の背景には、ファイヒテが無神論論争を通じて獲得した深い宗教的洞察がある。(略)

『人間の使命』は「偽」・「知」・「信」の三部から成っている。：自由を求める我々は、「知」の段階において、一切は我々の表象にすぎないことを知る。：そこで我々は認識とは異なる器官、すなわち「信」において実在性を把握する。この信こそ良心の声への服従であり、それによって我々の善意志はその最終目的を超地上的世界において実現する。：しかし、この信仰の立場は、決して知を離れて成り立つものではなく、知を知として真に妥当せしめんとする意志の決断のことである。こうしてファイヒテは単なる知識を超え、知を真に生かし働かしめる信の立場に立つ。これは決してファイヒテが知識学の立場から宗教の立場へと移行したことを意味するのではなく、知を超えたところに知の根柢を求めつつも、あくまでも知を離れぬ知識学の立場に留まっていることを意味しているのである。それは知の彼方への超出ではなく、知の根柢の深まりである<sup>5)</sup>。

この「知の彼方への超出ではなく、知の根拠の深まり」という意味をもつ変更は、フッサールによれば、「宗教的・倫理的手段を通じて最高次の人類の理想へと発展進化されるべき人間存在の向上」の「五段階」をもつ「新たな神論であり救済論」という形で具体化される。この「五段階」は「神性に対する人類の遠ざかり Entfernung と近づく Annäherung の五段階」であり、「わたしたち人間が自由に選択することができる」ということが「アプリオリな仕方です描されている」ような「五段階」のことである。これらの段階は「1. 感性の立場」、「2. 人倫性の立場」、「3. 高次の道徳性の立場」、「4. 宗教の、信仰の立場」、「5. 直視 Schauen の、『学』の立場」という名称をもち (Vgl., XXV, 283 f.)。

本論考では、フィヒテ神論の最終段階であり「知の根拠の深まり」の段階である「直視 Schauen の、『学』の立場」に着目する。その理由を予め述べておくと、ここで示されるフィヒテの〈哲学による宗教の基礎づけ関係〉が、フッサール現象学にもそれ相応の仕方です継承されていると思われるからである。

では「知を知として真に妥当せしめんとする意志の決断」と解されるフィヒテの「直視 Schauen の、『学』の立場」とはどのような立場なのか。この立場と直接対比される第四の「宗教の、信仰の立場」との差異に言及しつつ明らかにしたい。

「宗教の、信仰の立場」とは、「わたしたちが知っているように、誰であれ人間はみな、神的存在の展開という一つの光りの発出 ein Strahl であり、神がその自己啓示のために：創造した器官の一つ」(XXV, 289)であるということに気づき、そこからさらに「ある人が、本来的な仕方です絶対的に価値あるものとして絶えず意欲しそれを獲得しようと努力する何かは、己れ自身の個別的な生と努力のなかでの神の存在と生の展開」(XXV, 290)に他ならない、ということを自覚した段階のことである。これに第五の段階が対置される。

それでもわたしたちはまだ最高の立場に入っていない。それはたんに宗教的に神に気づいている Gott-Innensein



ではなく、神を知る *Gott-Wissen* の立場である。完成された哲学的洞察に基づく宗教的意識の立場ということもできるだろう。フィヒテはこれを「学の立場」と名づけている。そこにおいて、心 *Gemüt* のなかにある状態であり生ける事実である宗教が学の主題になる。神と人間の生の統一と連関、さらにこの連関の究極的ないかに *Wie* が絶対的に完全な学において洞察へともたらされる。宗教者は己れに与えられた連関の事実で満足し（これに對して）学は説明を与える。——しかし、それを通じて単純な信仰は、哲学的洞察に貫かれることで「直視」へと高められるのである（XXV, 291）。

フィヒテ神論の最終段階である「哲学的洞察に基づく宗教的意識の立場」とは、「理論的な世界解釈が実践的な人類の向上と人類の救済、人間の内的な作り換えのための土台となる」と考える「観念論的／理想主義的实践者」フィヒテの〈哲学による宗教の基礎づけ関係〉の立場である、とフッサールは見ている。

ここで本論考が解答すべき問いが先鋭化される。「観念論的／理想主義的实践者」フィヒテによって示された〈哲学による宗教の基礎づけ関係〉という知見はフッサールの現象学にとつていかなる意味をもつのか、と。

## 2 フィヒテとフッサールとを結ぶもの——『厳密な学としての哲学』——

前節での問いに答えるために、いったん「フィヒテ講義」を離れて、前節で示した〈プラトンと比肩されるフィヒテ〉というフッサールの視座が、この講義に先立つ一九一一年の『厳密な学としての哲学』のなかですでに提示されていた、という事実に目を向けてみよう。

：「厳密な学という意味での哲学を根底から新たに形成しようとする十分に自覚された意志である」このような厳密な学に対する十分に自覚された意志こそが、哲学のソクラテス—プラトンの転回を支配していた。そしてまったく同様に、近代のはじまりにおいて、スコラ哲学に対する学的リアクションを、とりわけデカルト的転回を支配していた。その衝撃は、一七、一八世紀の偉大な哲学に伝えられ、カントの理性批判のなかでもっとも徹底的な力で刷新され、さらにフイヒテの哲学的思惟をも支配したのである (XXV, 6)。

ソクラテス—プラトンからフイヒテに至るまで、彼らの哲学的思惟を支配していたとされる厳密な学とは何か。

その始まりから哲学は、厳密な学であること、それも最高の理論的欲求を満足させ、かつ倫理的—宗教的な観点では、純粹な理性規範にしたがって規制された生を可能にする学であることを要求してきた (XXV, 3)。

ここから明らかなように、厳密な学とは、理論的観点において人間の生がもつ最高の欲求を満足させるだけでなく、それに基づく理性規範に従って、倫理的—宗教的観点において人間の生をより善くより正しく規制することを目指す学のことである。それゆえ、フッサールにとって、上述の「観念論的／理想主義的実践者」フイヒテとは厳密な学を目指す哲学者フイヒテのことに他ならない。そしてもちろん、フッサールは己れを厳密な学の実現を目指すという意志をもつ哲学者の系譜に位置づけている。したがって、フッサールの現象学は、ソクラテス—プラトンやフイヒテと同様、たんに理論的な事柄だけを探求する学ではなく、そこで獲得された理論に基づく理性的規範によって、倫理的—宗教的な領域において人間の生の実践的刷新しようと試みる学なのである。

ここにおいて、前節の最後で提示した問いに対する答が明らかになる。すなわち、フイヒテとフッサールとは同じ一

つの「厳密な学」の系譜に位置づけられるという仕方、フツサールはフィヒテの〈哲学による宗教の基礎づけ関係〉という知見を継承しているのだ、と。この「厳密な学」こそがフィヒテとフツサールとを結ぶものなのである。

この人間の生の実践的刷新、人間の生と文化の刷新を目指す現象学像が「フィヒテ講義」を経た一九二〇年代に入つてフツサールによって前面に押し出されてくるという事実も、この「厳密な学」がフィヒテとフツサールとを結ぶものであるという主張を支持する一つの証左である。

厳密な学だけが、ここで確実な方法と確固たる成果とを成し遂げることができる。したがつて、ただそれだけが、合理的な文化の改革がそれに依存する理論的な準備作業を供給することができる (XXVII, 5 f.)。

∴人間の刷新——個々の人間と共同体化された人類の刷新——があらゆる倫理学の最上のテーマである。倫理的な生とはその本質からして、刷新という理念のもとに意識的に立つ生、それ〔刷新という理念〕に意志的に指導され、形態化された生のことである (XXVII, 20 f.)<sup>9)</sup>。

### 3 フィヒテ神論とフツサール現象学とを結ぶもの

#### ——「人間性の発展における文化の形式的類型」論文——

では「厳密な学」という理念を介してフィヒテからフツサールへと継承された〈哲学による宗教の基礎づけ関係〉とはいかなるものか。これを明らかにするために、1節で示したフィヒテの「単純な信仰」を「『直視』へと高める」「哲学的洞察」をフツサールがどのような洞察と解釈したのか、という問いについて考察する。

「現象学がもつ固有独自の意味とその文化機能」(XXVII, 96)を明らかにすることを目指して執筆された一般に『改造』論文と総称されている論文の一つにおいて、フッサールは人類の文化の二大形式としての「宗教と学問(哲学)」について論じている(Vgl., XXVII, 59-94)。この論文における宗教と学問との関係を手引きにしてこの問いに答えてみたい。

フッサールは「宗教」を次のように規定する。まず「動物がたんに本能のもとに生きている」のに対して「人間はもろもろの規範のもとにも生きている」。人間は「規範的意識」をもつて生きている。この規範は二種類に大別される。すなわち、特定の時代、特定の場所においてだけ効力をもつような「事実的に妥当する」ものとして意識されるような規範とそうした特定の時間と場所を超えて「絶対的に妥当する」ものとして意識されるような規範とに大別される。フッサールは、後者の規範の例として「絶対的に無条件的なものという形式における『わたしはなすべし ich soll』、『わたしは許されない ich darf nicht!』という「神の戒律」を挙げている。このような後者の規範の根拠となるものが「神話に基づく文化 mythische Kultur の高次段階を意味する宗教」である(XXVII, 59 f.)。

こうした意味での宗教に由来する規範は、多くの場合「信仰」という形式で、個人が属するある特定の共同体を規制する規範として機能する。その結果、人間は己れが生まれる際に帰属する共同体を選択することができないから、生まれた時から特定の共同体のなかですでに「世襲化されている信仰」に縛られることになる。この規範として機能する世襲化された信仰によって特定の共同体に属する個人が被る生き辛さをフッサールは宗教がもつ「不自由さという性格」と呼ぶ(Vgl., XXVII, 63)。

しかし同時に、こうした信仰と規範とを「批判する能力」とその能力の根拠としての「自由」とが「人間の本質」としてわたしたちには予め与えられている。この「自由」と「批判する能力」に基づく宗教的「伝統に対する自由な態度決定」(XXVII, 64)をフッサールは「宗教的な自由活动 religiöse Freiheitsbewegung」(ebd.)と呼ぶ。

この「宗教的な自由活動」が引き起こす一人ひとりの「個人とその人格性の転向」(XXVII, 66)が「宗教の改変」の原動力となる。すなわち、「批判する能力」を手段として、信仰と規範のうちに潜在している「根源的な仕方で見られる価値や規範という力」(XXVII, 65)をもう一度取り戻すことによって世襲化され形骸化された伝統的宗教が突破されるのである。「權威の源泉への問い」(XXVII, 53)を通じて規範、信仰そして宗教の起源へと立ち戻ること、これが「宗教的な自由活動」の本質的機能に他ならない。こうした起源への遡行によって、形骸化された価値や規範としての宗教に對置される、「根源的な仕方で見られる価値や規範」が取り戻された宗教をフツサルは「世界宗教」と呼ぶ(Vgl. XXVII, 66 f.)。

このような仕方では「盲目的伝統に由来する宗教」(XXVII, 67)が突破された一つの歴史的事例が「宗教改革」であり「ルネサンス」であった。フツサルは、この中世から近代への突破において、宗教改革とともに「学問」の改革もなされたとみる。すなわち、キリスト教的世界観(宗教観)の枠組みを決して踏み越えることのない「キリスト教神学」(XXVII, 69)から、その「キリスト教神学」に内在していた古代の「理論的自由という精神に由来する哲学」(ibid.)への回帰がなされたのである。フツサルはこれを「突破としての近代」を特徴づけるルネサンスの二側面と呼ぶ。

∴ 哲学的理性(哲学的学問)に由来する理性的な人間生という古代の文化生のルネサンスとして、そして根源的な信仰の源泉に由来する、根源的な宗教的経験に由来する宗教という古代キリスト教的 *altchristlich* (あるいは古代キリスト教的とみなされた) 宗教的理想のルネサンスとして (XXVII, 91)。

ルネサンスによって取り戻された「理論的自由という精神に由来する哲学」は、中世の「キリスト教神学」のように、伝統的な「神話的動機と宗教的動機」(XXVII, 76)によって長きにわたってその枠組みが予め制限されてきた学で

はない。それは、純粹に理論的に「事象的なもの『そのもの』への適合 *Anmessung an die Sachlichkeiten „selbst“*」第一の意味での真なるものへの適合」(XXVII, 77) によって動機づけられる学である。こうして宗教改革以降の宗教には、中世の「キリスト教神学」とは異なるこうした学による新たな基礎づけの可能性が開かれたのである。

ここから本節の冒頭で提起した問いへの答が明らかになる。フッサールは、フィヒテの哲学的洞察をこの脈略における理論的で事象そのものへの適合によって動機づけられた哲学的洞察と解釈した。すなわち、世襲化され形骸化された宗教信仰を、それがもつ根源的な意味を理解しないまま無批判に受け継ぐという意味での「他律」と対置される「自律的な確実性動機 *autonome Gewilheitmotive*」(XXVII, 77f.) に基づく学としての哲学的洞察であると解釈した、と。

ではこの意味での学としての哲学的洞察は現象学のなかでどのように規定されるのか。フッサールはこの論文への付論 (XXVII, 100-103) のなかでこう述べている。

わたしには直観が、根源的な仕方での「宗教的経験」が必要である。…わたしたちは、そのために普遍的な現象学的世界考察と世界直観とを用いる、あらゆる目隠し *alle Scheuklappen* からの解放を用いる (XXVII, 102)。

こうした「根源的な仕方での『宗教的経験』」のために要請される現象学的考察によって基礎づけられた宗教をフッサールは「宗教形而上学」と呼ぶ。

…宗教形而上学としての宗教、普遍的に理解する学の究極の帰結として、あらゆる直観による神話的象徴体系 *tativ mystische Symbolik* とその空想形態化と改変形成 *Umbildung* とを規制する規範としての宗教 (XXVII, 103) <sup>20</sup>。

ここでもう一度フイヒテ神論における「神に気づくこと」と「神を知ること」との区別とそれを可能にする（哲学による宗教の基礎づけ関係）という知見に立ち戻らう。

フッサールは、フイヒテの「神に気づくこと」である「己れ自身の個別的な生と努力のなかでの神の存在と生の展開」という気づきを「宗教的な自由活動」が引き起こす「個人とその人格性の転向」、「個人的な生の心術がもつ徹底的な仕方でも新たに形成すること」（XXVII, 66）への気づきと解釈する。そして、この「転向」と「形成」を唯一可能にするものが哲学的洞察としての「宗教形而上学」なのである。ここからフッサールは「神を知ること」を、現象学に基づく理性規範としての「宗教形而上学」によって基礎づけられた宗教の段階、換言すれば、「宗教形而上学」を手段として、己れの生のなかで、すべての宗教的経験をその起源から問い直そうとする自律的な意志決断に基づく宗教の段階と解釈する。現象学によって新たに彫琢された「宗教形而上学」、これこそが（哲学による宗教の基礎づけ関係）という知見をめぐって、フイヒテ神論とフッサール現象学とを結ぶものなのである。

### おわりに

フイヒテとフッサールは「厳密な学」という理念を共有し、そのなかでフッサールは純粋に理論的で事象的なものへの適合に動機づけられた（哲学による宗教の基礎づけ関係）をフイヒテから継承しつつ、そこから現象学に基づく理性規範としての「宗教形而上学」を構想したのであった。以上のことから「フイヒテ講義」はフッサールの哲学的見解がほとんど反映されていない講義などではなく、現象学と宗教の基礎づけ関係をめぐるフッサールの見解をフイヒテに依拠して提示するための講義であった、ということの本論考は明らかにした。

しかしフイヒテの「神を知る、学の立場」とフッサールの「宗教形而上学」の立場はその内実に関してどのような異同をもつのか、という新たな問いに答えるためには、フイヒテ神論（知識学）と後期フッサール現象学へのさらに立ち入った検討が不可欠である。だがそれは本論考の範囲を超えるため今後の課題としたい。

註

フッサールのテクストからの引用はフッサール全集（*Husserliana*）を用い、本文中に全集の巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で挿入した。

- (1) *Husserliana* Bd. XXV, *Aufsätze und Vorträge* (1911–1921). Hrg. von Nemon, Th.; Sepp, H. R., 1987, S.267–293. 「フイヒテ講義」を主要なテクストとする先行研究には、里美軍之「理想主義者フッサール——フッサールのフイヒテ講義によせて——」『現象学年報』第七号、一九九一年、一七〇–三二頁、大橋良介「フッサールのフイヒテ解釈」『フイヒテ研究』第五号、一九九七年、九〇–二七頁、同「フッサール現象学における『絶対的なもの（絶対者）』——一九一七／一九一八年のフッサールのフイヒテ講義を出発点として——」『理想』No.687、二〇一一年、一五九〇–一七八頁、以下に Hart, J. G., “Husserl and Fichte: With special regard to Husserl’s lectures on ‘Fichte’s ideal of humanity’”, in: *Husserl Studies* 12, 1995, S.135–164 などがある。またより広くフイヒテ知識学とフッサール現象学とを比較した研究としては、新田義弘「生命と知識——〈Durch〉の媒介機能への現象学的考察——」『フイヒテ研究』第五号、一九九七年、二八〇–四〇頁、渡邊二郎「一八〇四年の『知識学』と現象学」『フイヒテ研究』第五号、一九九七年、四一〇–五九頁、Tiefen, H., *Fichte und Husserl. Letztbegründung, Subjektivität und praktische Vernunft im transzendentalen Idealismus*, 1980, Seebohm, Th. M., “Fichte’s and Husserl’s critique of Kant’s transcendental deduction”, in: *Husserl Studies* 2, 1985, S.53–74, Wildenburg, D., “Denkkinsteleien’ versus ‘Menschenbeobachtung’? Fichte und Husserl”, in: Carr, D./Lorz, C. (Hg.): *Subjektivität – Verantwortung – Wahrheit. Neue Aspekte der Phänomenologie Edmund Husserls. New Studies in Phenomenology/ Neue Studien zur Phänomenologie*, Bd. 1, 2002, S.281–301 などがある。
- (2) 例えば里美軍之は「講義内容がフイヒテ哲学の祖述でしかないことが第一に腑に落ちない点」であり、「第二にこの講義が……とらわれ無神論論争前後に比重の偏った祖述であることも不思議な点の一つ」であり、さらに「第三の奇妙なことは……フイヒテ



- 晩年の思弁的宗教論をフッサールが本当に気に入っていたとはとても信じられない」と述べている（里美、前掲書、二三―二四頁参照）。
- (3) 大橋、前掲書、一九九七年、一〇頁参照。
- (4) フッサールはプラトンの師ソクラテスについてこう述べている。「なるほど彼（ソクラテス）は理論的哲学者ではなく実践者であった。しかしそれは、彼にとつては理論的認識ではなく生を理性的に指導するものが第一のものである、という限りにおいてそうなのである」。「しかし、彼は理性的な人間生、したがって真に満足を与える人間生はただ哲学的な生としての真に可能であるとみなしている」。（この意味で「哲学とは理性的実践の一機能のことであり、それ「哲学」は、それにとつての真の目標を認識させる機関 Organ である。行為することとは真正な知に従う」と（Vgl. *Husserliana* Bd. XXVII, *Aufsätze und Vorträge* (1922–1937), Hsg. von Nennon, Th.; Sepp, H. R., 1989, 86 f.）。
- (5) 長澤邦彦「超越論哲学としての『知識学』」『講座ドイツ観念論3 自我概念の新展開』廣松渉・他編、平成二年、九五―九六頁参照。
- (6) しかしこの厳密な学としての哲学は現象学によつて完全な形で実現されうるようなものではなく、その在り方を規定する一つの理念である（Vgl. XXV, 52 f.）。「…厳密な学は客観的な存在ではなく、理念的な客観性の生成である。それは、本質的にただ生成のうちに存在する。それゆえ、真正な人間性 *echte Humanität* とその自己形態化の方法もただ生成のうちに存在する」（XXVII, 55）。
- (7) ハートは、フッサールにとつての「宗教的経験に対するある種の明証」は超越論的現象学に基づく「合理的」な明証である、と述べている（Hart, op. cit., S.155）。